

## 認知言語学から見たジェンダー(2)

著者名(日)	本多 啓
雑誌名	駿河台大学論叢
号	30
ページ	121-135
発行年	2005
URL	<a href="http://doi.org/10.15004/00000990">http://doi.org/10.15004/00000990</a>



# 認知言語学から見たジェンダー (2)

本 多 啓

## 1 認知言語学のメタファー観

本稿では、言語とジェンダーの関係について、メタファーに関わる問題を中心に取り上げて検討する。ただし、メタファーによる議論の一般的な妥当性を確認するために、まずはジェンダーとは直接関係しない領域の表現を検討する。図1を参考にしながら、(1)の表現を完成させていただきたい。

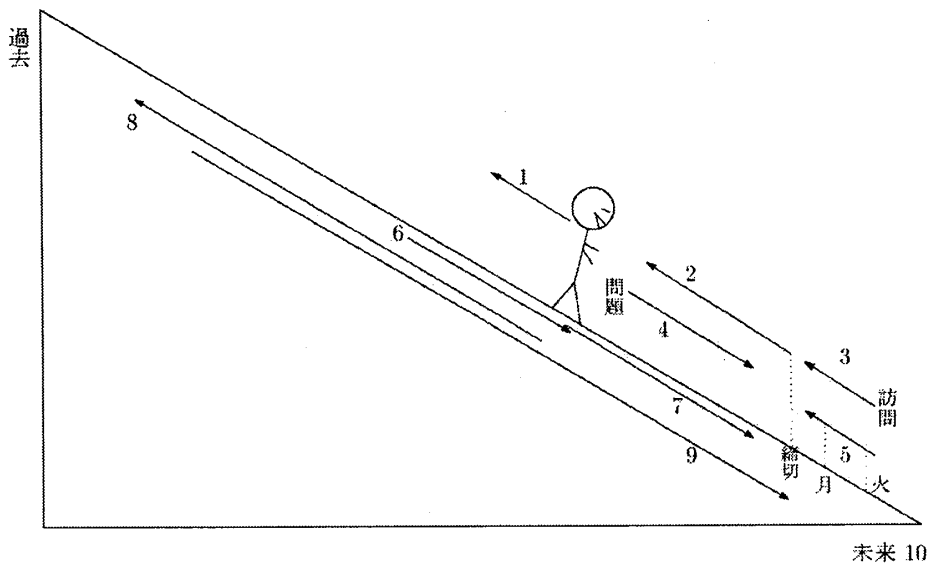


図 1: 空間から時間へのメタファー

- (1) a. 過去を (1) てもしようがない。
- b. 締め切りが (2a) て (2b) 。
- c. 訪問の予定を繰り (3) る。
- d. 問題を (4) 送りする。
- e. 月曜日は火曜日の (5) だ。
- f. これまで一生懸命がんばって (6) た。
- g. これからも一生懸命がんばって (7) ます。
- h. 時代を (8) 。
- i. 時代は (9) って明治元年。
- j. この事業の (10) が心配だ。

これに対して筆者が用意した解答は、それぞれ「振り返っ」「近づい／迫っ」「きた」「上げ」「先」「前」「き」「いき」「さかのぼる」「くだ」「先行き／行く末」である。

これらの表現には、次のような特徴がある。

まず、これらはすべて、もともとは空間表現である。これとの関わりで、ここでまた一つ問題を出しておくことにしよう。時間に関わる事項を表す表現のうち、もともと時間表現であるもの（すなわち、空間など、時間以外の事項を表す表現からの転用でないもの）、あるいは時間というものに固有の表現（時間以外の事項を表すのに用いられたことがないもの）は、どれくらいあるだろうか。そもそも、時間とは何なのだろうか。

第二に、上記の諸表現は、各々独自ないしばらばらに時間表現としての用法を発達させたわけではない。空間表現が一斉に時間表現に転化しているのである。たとえば「くる」という語に時間的な意味が発生したのは、「来る」に固有の、あるいは、偶然の、事情によるものではない。

しかも、空間表現から時間表現への意味変化は一斉に起こっているだけでなく、組織的・体系的に生じている。それは、上記諸表現の空間表現としての用法を整理するのに用いることができる図 1 がそのままの形で整合性を保持したままこれらの表現の時間表現としての用法を整理するのにも用いることができる、というところに現れている。たとえば「未来を振り返る」とは時間旅行の話をしているような場合を除いては言うことはできず、また「締め切りが近づく」ことを「締め切りが遠ざかる」と言うこともできない。

最後に、われわれは日常上記の諸表現を用いる際に、以上に述べてきたような特徴

をほとんど意識していない。また、これらの諸表現に修辞性を感じることもほとんどない。

これらの特徴はどのように説明されるのだろうか。

認知言語学では、上記の表現を「時間は空間である」という空間から時間へのメタファーの例と考えている。それでは、いったいメタファーとは何なのだろうか。

それを考える前に、先ほどの問題に戻ろう。そもそも、時間とは何なのだろうか。「時間とは何か」という質問に、まともに答えられる人はほとんどいないだろう。筆者自身は以前に「熱力学第二法則」とか「エントロピー」とかいう言葉を聞きかじったこともあるが、これらの用語は筆者のような素人には時間の正体について教えてくれるどころか、かえって話をややこしくするだけのように感じられた。とりあえずここでは、時間というものは、何やらわけの分からないものであるとしておこう。

正体の分からないものをどうにかしてとりあえず分かったことにしたい、というときの一つの戦略として、そのよく分からないもの(典型的には抽象的なもの)を、よく分かっていると信じられているもの(典型的には具体的なもの)に見立てるというやり方がある。それは、既知と信じられるものについての構造的な知識ないし概念を未知のものに転写ないし写像することによって、未知のものについての構造的な知識ないし概念を作り上げる、という形で行われる。言語との関わりで述べるならば、それは、既知のものに適用される語彙をそのまま未知のものに適用するということである。それによって、未知だったものをとりあえず分かったことにすることができる。これが認知言語学で考えるメタファーである<sup>2)</sup>。上記の例においては、時間というつかみどころのない未知のものに対して、空間という具体的な経験を通じて直接的に知ることができるものについての知識を転写しているわけである。

メタファーは時に、「二つのものの間の類似性を基盤として成立する」と言われることがあるが、その考え方は全面的に正しいとは言えない。ここまでの見方では、二者間の類似性はあらかじめ存在しているとは見なされるのではなく、概念形成の際に構築、ないし少なくとも発見されるものということになる。たとえば、空間を表すための語彙が時間に広汎に転用されているという事実と言及せずに、アプリアリなレベルで時間というものが空間に似ているということを示すことは困難であろう。

時間を表す空間表現の体系性は、メタファーが概念間の構造の写像であることから説明される。時間という概念を空間に見立てて構築する際には、空間に関わる語彙が一斉に、しかも表現間の相互の意味的な関係を保持したままで、時間を表現するのに転用されるわけである。また、われわれが日常(12)の諸表現を用いる際に、ほとん

ど修辞性を感じない、ないしはそもそもメタファーであるということを意識しないということには、二つの意味合いがある。一つは、メタファーによる概念形成はかなり「深い」（これもメタファーの例である）レベルで時間（をはじめとする世界の中の諸事物）に対するわれわれの捉え方を規定しているのであろうということ。メタファーが単なる「表層の」言葉のレベルのものであるならば、われわれはもう少し簡単にメタファーに自覚的になれてもいいはずである。第二に、日常の言語にはメタファーが他にも広汎に存在するということである。

メタファーは言葉のうえだけの問題ではなく、概念ないしは世界に対するわれわれの捉え方の問題である。そしてメタファーは詩的言語や政治的な言説を彩る修辞法にとどまるものではなく、日常の言語に広汎に存在するものなのである。

ところで、時間を理解するためのメタファーは、「時間は空間である」に限られない。たとえば、

- (2) a. 時間がかかる／時間をかける
- b. 時間を無駄に使う

などのように、時間は金銭についての表現を用いて語ることもできる。すなわち、時間については「時間は金銭である」というメタファーも用いられている。

「時間は空間である」と「時間は金銭である」という二つのメタファーは等価ではない。「時間は金銭である」というメタファーにおいては、〈限りある資源である〉という金銭についての日常的な知識が時間に投射されることによって、時間もまた、限りある資源と捉えられることになるが、「時間は空間である」というメタファーによる理解においては、そのような理解が前面には出されない。

また、「時間は空間である」というメタファーにおいて、〈時間それ自体〉と〈空間それ自体〉の間に写像関係が作られるわけではない。メタファーは概念領域の間の写像である。したがって、「時間は空間である」の場合に基盤になるのは〈空間それ自体〉ではなく、〈空間についてのわれわれの日常的な理解（素朴理論）〉である。これがもとになって、〈時間についてのわれわれの日常的な理解（素朴理論）〉が構築されるのである。したがって「時間は空間である」というメタファーにおいて基盤となる空間概念は物理学的な空間概念と必ずしも一致するものではない。またこのメタファーによって構築される時間概念は、物理学的な時間概念と一致するわけではないということは言うまでもないが、さらにたとえば、〈過去〉と〈未来〉をそれぞれ〈想

起)と〈予期〉に対応づけようとする心理学的な時間概念とも異なる。事情は「時間は金銭である」においても同様である。この場合に基盤となる金銭概念は、経済学等で用いられる貨幣の概念と一致するとは限らない。

「時間は…である」においては、理解の対象となる時間は、それ自体なにやらわけのわからないものであったが、「男性は…である」というメタファーの場合、理解の対象となる男性については、われわれはすでにある一定程度の知識を持っていると感じている。そのような、すでに理解できている(と思われている)対象を理解しようとする場合のメタファーは、その対象に対して新しい見方を提示する働きを持つ場合もあるが、すでに持っている知識の一部を強化する働きを持つ場合もある。

なお、「甲は乙である」において、基盤となる乙に当たるものを「起点領域 (source domain)」と呼び、構築される甲に当たるものを「目標領域 (target domain)」と呼ぶ。

以上を逆の方向から考えるならば、時間に関してどのようなメタファー表現が存在するかを分析することは、時間に関してわれわれが日常的にどのような理解の仕方をしているかの一端を明らかにすることにつながることになる。これはジェンダーなど、時間以外のものについても同様である。したがって、男性と女性に関してどのようなメタファー表現が存在するか(あるいは、しないか)を考えることは、ジェンダーについてわれわれが日常的にどのような理解の仕方をしているかの一端を明らかにすることにつながるわけである。言葉とジェンダーの関係についての研究にメタファーを導入することの意義は、ここにある。

## 2 ジェンダーに関わるメタファー表現

ジェンダーに関わるメタファー表現には、人間が目標領域になる場合と、人間が起点領域になる場合とがある。日本語に関して、前者に着目した研究として篠原・森住・高田・佐藤(2001), Hiraga (1991), 平賀(1997)などがある。英語に関しては Hines (1996, 1999)がある。たとえば、次のような例がこれに該当する。

- (3) 〈人間〉が目標領域になる場合:
- a. 二番目の奥さん进行
  - b. \* 二番目の旦那さん进行

筆者自身のインターネット検索サイト Google を用いた調査では、(3a) は実例が多く観察されるのに対して、(3b) の実例はごく少数にとどまる。このことは、女性が分離可能所有物として概念化されやすいのに対して男性がそうでないこと、そして結婚が分離可能所有物のやりとりとして概念化されていることを示している。後者の、人間が起点領域になる場合の例としては、次のようなものがある。

(4) 〈人間〉が起点領域になる場合:

「母校」「母国」「母集団」「産みの苦しみ」「処女作」「処女航海」など

たとえば、「処女作」において、「処女」にあたる部分を男性に変えた表現は日本語には存在しない<sup>3)</sup>。

以下、この二つのそれぞれに関して、簡単に見ていくことにする。

### 3 〈人間〉が目標領域になる場合

#### 3.1 篠原他 (2001)

篠原他(2001)は、日本語における男性と女性に関するメタファー表現の例として、次のようなものがあることを指摘している。

(5) 1. 女性と解釈されるメタファー表現

1.1 植物

(a) 壁の花 (b) オフィスの花 (c) 両手に花 (d) 立てば芍薬座れば牡丹歩く姿は百合の花 (e) 高嶺の花 (f) 綺麗なバラには刺がある (g) 花を手折る (h) 大和撫子

1.2 動物

(a) うぐいす嬢 (b) 夜の蝶 (c) 小鳥 (ちゃん) (d) 獲物 (e) かごの鳥 (f) 古狐 (g) 釣った魚に餌はやらない

1.3 その他

(a) つまみ食い (の対象) (b) 据え膳 (c) 味見 (の対象)

2 男性と解釈されるメタファー表現

2.1 植物

(a) 大木 (b) 同期の桜 (c) 濡れ落葉

## 2.2 動物

- (a) 古狸 (b) 野良犬 (c) 狼 (d) 送り狼 (e) 一匹狼 (f) 種馬  
(g) けだもの (h) 若いツバメ

女性に関する表現と解釈される動植物の特徴としては、次のようなものがある。

- (6) 女性に関する表現と解釈される動植物の特徴
- a. 見て (聞いて) 美しいもの (1.1a-1.1b)
  - b. 比較的小さいサイズのもの (1.2a-e)
  - c. 獲物あるいは食べる対象 (1.2d,g, 1.3 a-c)
  - d. ペットとして飼う・扱う対象 (1.2 c,e,f)

このことは、日本語話者が女性に関して次のような捉え方をしていることを反映ないし強化していると言することができる。

- (7) われわれの社会で一般に考えられている女性の社会的特性
- a. 外見が美しい, 美しくあろうとする (装う)
  - b. 社会的に小さい (弱い立場)
  - c. 性的な対象であり, 受動的な振舞いをする
  - d. 保護を受ける

## 3.2 平賀 (1997)

平賀 (1997) は、男性と女性についてのメタファー表現を広範に取り上げて検討している<sup>4)</sup>。

まず男性と女性について、次のような非対称的な表現がある。

- (8) a. あの女はおれの物だ。 / ? あの男はわたしの物よ。  
b. 花子は男に捨てられた。 / ? 太郎は女に捨てられた。<sup>5)</sup>  
c. 太郎はあの女をきず物にした。 / \* 花子はあの男をきず物にした。<sup>6)</sup>

これらの例から、次のようなメタファーの存在が想定される。



(9) 〈女は品物だ〉

また、(10) から (11) が想定される。

(10) a. 太郎は昨夜女を買った。 / \* 花子は昨夜男を買った。<sup>7)</sup>

b. あの女は体を売って暮らしを立てていた。 / ?? あの男は体を売って暮らしを立てていた。

(11) 〈女は商品だ〉

また次の例は、結婚が売買として概念化されていることを示す。

(12) a. お嬢さんを僕にください。 / \* 息子さんを私にください。

b. 早く娘を嫁にやらねば。 / \* 早く息子を婿にやらねば。

c. うちの息子はいい嫁をもらって幸せだ。 / \* うちの娘はいい婿をもらって幸せだ。<sup>8)</sup>

d. 花子は箱入り娘だ。 / \* 太郎は箱入り息子だ。

e. あの家には売りだし中の娘がいる。 / ? あの家には売りだし中の息子がいる。

f. 親戚中でうちの娘の売れ口をさがしている。 / \* 親戚中でうちの息子の売れ口をさがしている。

g. 娘がかたづかなくて困っています。 / \* 息子がかたづかなくて困っています。

h. あちらのお嬢さんは売れ残っています。 / \* あちらの息子さんは売れ残っています。

(13) a. 〈未婚の女は商品だ〉

b. 〈夫 (の家) は妻を買う〉

c. 〈結婚は売買だ〉

以上から、図2のような概念構造の存在が想定される。

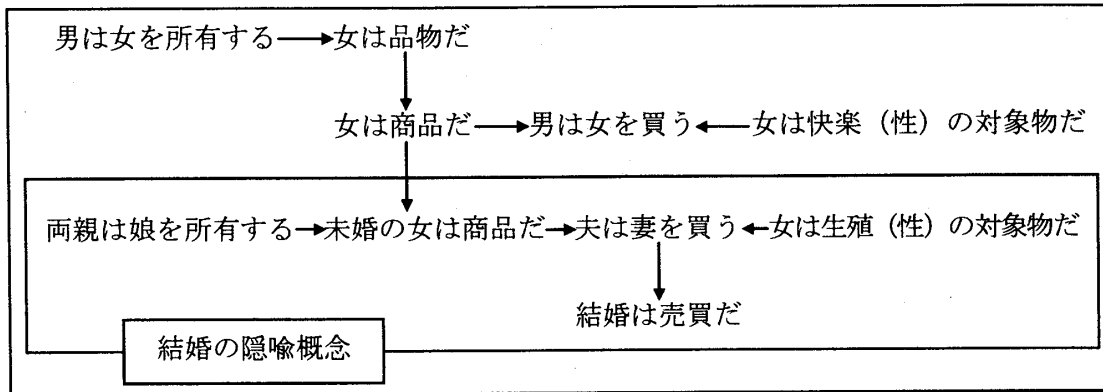


図2: 商品としての女性の概念構造 (平賀 1997: 119)

また、女性は食べ物としても概念化されている。それを示す例が (14), (15) であり、背後にあるメタファーが (16) である。

- (14) a. おいしそうな女だ。 / ?? おいしそうな男だわ。  
 b. あの女は食べごろだ。 / \* あの男は食べごろよ。  
 c. 太郎は女をつまみ食いするから気をつけなさい。 / \* 花子は男をつまみ食いするから気をつけなさい。  
 d. 太郎はいかにも女に飢えている様子だ。 / \* 花子はいかにも男に飢えている様子だ。  
 e. あの女優は今が旬だ。 / \* あの男優は今が旬だ。  
 f. 娘に虫がつかないうちに早く結婚させねば。 / \* 息子に虫がつかないうちに早く結婚させねば。  
 g. うちの娘もそろそろとうがたってきた。 / \* うちの息子もそろそろとうがたってきた。

(15) あの男は女を食べ物にする悪い奴だ。 / ? あの女は男を食べ物にする悪い奴だ。

- (16) a. 〈女は食べ物だ〉  
 b. 〈女は果実(野菜)だ〉  
 c. 〈男は女を食べる〉  
 d. 〈セックスは食事だ〉

これらは、より一般的には、次のような例の中に位置づけることができる。

(17) あいつは年寄りを食べ物にする悪い奴だ。／もうこうなったら僕のことは煮るなり焼くなりしてくれ／あいつは人を食ったような態度をしている。／彼は悪業者の餌食になった。／ピッチャーは四番打者を上手に料理した。／私はまな板の鯉です。

- (18) a. 〈人間は食べ物だ〉  
 b. 〈強者は弱者を食べる〉

以上をまとめると、図 3 のような概念構造になる。

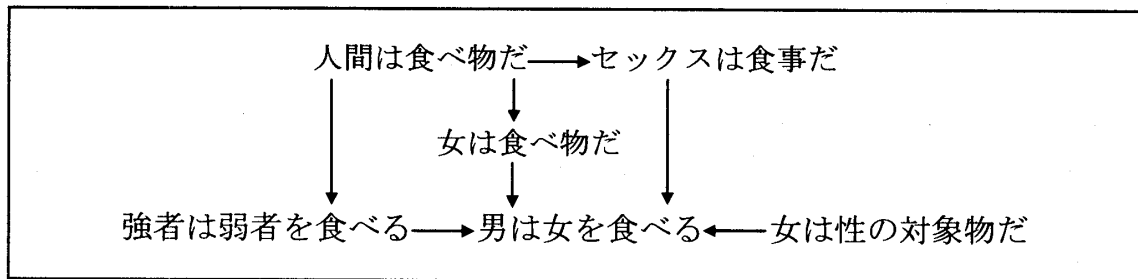


図 3: 食べ物としての人間 (平賀 1997: 123)

### 3.3 英語の例: the WOMAN AS DESSERT metaphor

英語におけるジェンダーメタファーの例として、Hines (1996) があげているものを紹介しておく。

- (19) (piece of) cake, cookie, crumpet [Brit], cupcake, pancake [Brit], (a tasty bit of) pastry, (cherry) pie, poundcake, pumpkin (pie, tart), pumpkin, muffin, [jam] tart, tartlet/tartlette/cheesecake

Hines (1996) によれば、これらはすべて実例である。ただし、これらのすべてを使ったり、用法として存在すると認める話者はいないであろうし、それぞれの用法の意味についても意見の一致が見られるとは限らないとのことである。

これらの表現がもともと指示対象としている食べ物の特徴としては、まず第一に、(20) がある。

- (20) 外側はかたいが、中はやわらかいか、または水分が多い。そして切り分けることが可能であるか (*cake, (cherry) pie, poundcake*) , もしくは細かく分かれたものをまとめて出す (*cookie, cupcake, tartlet*) かのいずれかである。

この特徴づけに合わない (21) は容認不可となる。

- (21) \**custard, \*ice cream cone, \*mousse*

第二の特徴として (22) がある。

- (22) 加熱の過程を経たものであり、氷菓などは含まれない。

これは、Lakoff (1987: 409-410) の "The object of lust is Food, Lust is Heat" というメタファーと重なる。

第三の特徴として、"promiscuity"がある。すなわち、これらの表現が本来指す食べ物は、一人で独占的に食べるものではなく、他者とともに食べるもの、他者との共有の対象になるものである。

第四の特徴としては非人間化がある。すなわち、切り分けられた *pie* や、一片一片の *cookie* は相互に類似していて、個性を持たない。

参考までに第二の特徴で言及された Lakoff (1987: 409-410) の例を挙げておく<sup>9)</sup>。

- (23) 情欲は飢えである。情欲の対象は食物である。

- a. He is *sex-starved*.
- b. You have a remarkable *sexual appetite*.
- c. She's quite a *dish*.
- d. Hey, *honey*, let's see some *cheesecake*.
- e. Look at those *buns*!
- f. What a piece of *meat*!
- g. She had him *drooling*.
- h. You look *luscious*.
- i. Hi, *sugar*!

(24) 情欲は熱である。

- a. I've got the *hots* for her.
- b. She's an old *flame*.
- c. Hey, baby, *light my fire*.
- d. Don't be *cold* to me.
- e. She's *hot stuff*.
- f. He's still carrying a *torch* for her.
- g. I'm *warm* for our form.
- h. I'm *burning* with desire.
- i. She's *in heat*.

#### 4 〈人間〉が起点領域になる場合

佐々木 (2000) は、あるペット雑誌の「お見合いコーナー」の投稿文に用いられた表現を分析している。お見合いコーナーは、犬の交配相手を募集するためのものであるから、そこに用いられる表現は、飼い主がその犬の魅力的な点と考えるものを表現しているはずである。それらの表現を佐々木は、〈外見〉〈非活動的・非積極的〉〈活動的・積極的〉〈賢さ〉〈中立的〉に分類して、メス犬とオス犬にどのような表現が用いられているかを調べた。

調査の結果は、メス犬に対する表現としては、「かわいい」「美人」「毛並みがいい」など、〈外見〉に関する表現が一番多く、次に「おとなしい」「甘えん坊」などの〈非活動的・非積極的〉を表す表現が続いた。また、〈活動的・積極的〉や〈賢さ〉に関わる表現は少なかった。それに対してオス犬に対する表現としては、最も多かったのが〈中立的〉な表現で、それ以外はほぼ均一であった。すなわち、飼い主はメス犬に関しては元気で賢いことよりも、外見がよく受動的な性質を持った犬を高く評価できると考えているのに対して、オス犬にはそれは当てはまらないということである。そしてこの非対称性は、飼い主が人間の女性と男性に関して暗黙のうちに魅力として想定している性質の違いを反映していると考えられる。

## 5 まとめ

以上、認知言語学概念メタファー論の可能性の一端を紹介した。ジェンダーと言語の関係についての研究に、概念メタファー論が適用されることはこれまであまりなかったようである。しかし、認知言語学が明らかにしたことは、メタファーが世界についてのわれわれの理解に広く、なおかつ深く関わっているということであり、したがって、メタファーの観点からジェンダー表現を分析することは、大きな成果をもたらすはずである。今後の研究の展開に期待したい。

## 註

1) 本稿は2001～2002年度に教養文化研究所の助成を受けて行われた共同研究「ジェンダーと言語」の内容報告の一部であり、2002年2月28日に行われた研究所の研究懇話会の内容に基づいている。同じ共同研究の成果を踏まえて筆者がこれまで公開したものとしては、本多(2001, 2003)がある。

なお、本稿は言語とジェンダーの関係の研究にメタファーを導入することの有効性の一端を認知言語学を専門としない人に対して示すために、既存の研究成果を紹介することを意図したものであり、オリジナルな研究成果を提示することを目的としたものではない。

2) 認知言語学におけるメタファー論の古典としてはLakoff and Johnson (1980)がある。日本においてはいわゆる認知言語学が始まる以前から、佐藤信夫(佐藤(1992a, 1992b))が認知言語学のメタファー論に近い議論を展開していた。また現在に至るまでの認知言語学のメタファー論の全体像を提示した文献として谷口(2003)がある。

3) ただ、言葉がゲシュタルトであることを考えれば、「処女作」という複合表現に「処女」の意味がどれくらい残っているかについては議論の余地があるのだが、本稿ではその問題は取り上げない。

4) 以下、例文の判断は平賀による。筆者自身の調査は註に示す。

5) 「女に捨てられた」の実例は多数ある。

6) 「娘を傷物にした」の実例が多い。「息子を」はごく少数。

7) 「男を買う」は実例が多数ある。

8) 「息子」「娘」で調べるのには問題がある。次のような例を参照のこと。

(i) a. うちの兄はいい嫁さんをもらって幸せだ。(実例あり。)

b. うちの兄はいい奥さんをもらって幸せだ。(実例あり。)

c. うちの兄はいい妻をもらって幸せだ。(「妻をもらう」はかなり実例がある。)

- d. うちの姉はいい婿 (さん) をもらって幸せだ。 (「婿をもらう」は実例がある。)
  - e. うちの姉はいい旦那 (さん) をもらって幸せだ。 (「旦那をもらう」は少数実例がある。)
  - f. うちの姉はいい夫 (さん) をもらって幸せだ。 (「夫をもらう」は実例は、なくはない。)
- 9) 日本語訳については邦訳の pp.503ff を参照されたい。

### 参考文献

- Hines, Caitlin (1996) "What's So Easy about Pie?: The Lexicization of a Metaphor," *Conceptual Structure, Discourse, and Language*, ed. by Goldberg, Adele Eva 189–200, CSLI Publications, Stanford.
- Hines, Caitlin (1999) "Rebaking the Pie: The WOMAN AS DESSERT Metaphor," *Reinventing Identities: The Gendered Self in Discourse*, ed. by Bucholtz, Mary, Liang, A. C., and Sutton, Laurel A., Oxford University Press, Oxford.
- Hiraga, Masako (1991) "Metaphors Japanese Women Live By," *Working Papers on Language, Gender & Sexism* 1-1, 38–57.
- Lakoff, George (1987) *Women, Fire and Dangerous Things: What Categories Reveal about the Mind*, The University of Chicago Press, Chicago. (池上嘉彦・河上誓作他訳 (1993) 『認知意味論：言語から見た人間の心』 紀伊國屋書店) .
- Lakoff, George and Johnson, Mark (1980) *Metaphors We Live By*, The University of Chicago Press, Chicago. (渡部昇一・楠瀬淳三・下谷和幸訳 (1986) 『レトリックと人生』 大修館書店) .
- Nomura, Masuhiro (1990) "How We Conceptualize Time: Toward A Unified Explanation of Time Metaphors," ms, University of Tokyo.
- 佐々木恵理 (2000) 「動物をめぐることばと表現 (1) —犬の雑誌にみられる性差別的表現とジェンダー表現—」. 『ことば』 21, 45–64.
- 佐藤信夫 (1992a) 『レトリック感覚』, 講談社 (講談社学術文庫版) .
- 佐藤信夫 (1992b) 『レトリック認識』, 講談社 (講談社学術文庫版) .
- 篠原和子・森住史・高田麻里・佐藤理子 (2001) 「日本語における女性の概念化—動植物を用いた女性メタファー—」. 南雅彦・アラム佐々木幸子編, 『言語学と日本語教育 II』, 330–332, くろしお出版.
- 谷口一美 (2003) 『認知意味論の新展開.メタファーとメトニミー』, 研究社.
- 本多啓 (2001) 「認知言語学から見たジェンダー (1)」. 『駿河台大学論叢』 23, 139–157.

本多啓 (2003) 「認知言語学の基本的な考え方」. 辻幸夫編, 『認知言語学への招待』, 63  
-125, 大修館書店 (シリーズ認知言語学入門第1巻) .

平賀正子 (1997) 「品物としての女—メタファーにみられる女性観—」. 井出祥子編, 『女性  
語の世界』, 114-129, 明治書院.